



社会に開かれた教会

再び岩手県大槌町へ③

今回の参加者は前回より六人多い十九人。中でも若い人が多く、小、中、高、大、大学院生の五人と山口天使幼稚園の先生が四人も参加し心強い。このためボランティア

の仕事を内容も前回の仮設住宅訪問、学童保育の手伝いに加え、保育園の引っ越しの手伝い、桜の植樹、わかめの選別の手伝いなど多岐にわたる。震災から早や二年、



流木の十字架の前で話す李地区長

当初たくさんのNGOなどがボランティアを派遣していたが、長期化して経費の問題もあり、ボランティアペーアの撤収が増えていく。そんな状況の中でもカトリック司教協議会の援助活動などを担当するカリタスジャパンがボランティアペーアを継続している意義は大きい。山口・島根地区のカトリック教会が被災地にボランティアを派遣しているのは大槌町だけではない。下関ブロック（細江・長府・彦島の三教会）が中心となつて釜石ペーアにボランティアを継続して派遣している。そのような状況もあ

小、中、高、大、院生の五人の若者



の参加だった。

り、今回、山口・島根地区の最高責任者、地区長の李神父もボランティアとして参加された。震災復興が遅れ、支援活動が長期化する中で、今後の取り組みを含め最高責任者自ら参加する意義は大きい。特に今回のボランティア活動期間（三月二十七日〜四月一日）がち

ようど聖週間と重複していたにもかかわらず、そのキリストの死と

復活を記念するものが聖週間なのである。だから、できればボランティア派遣期間を聖週間から避けた。しかし学生や幼稚園、学校関係者が春休みを利用して参加するので聖週間と重なる。柴田団長は神父であり、難しい決断だったと思うが、学生など若者に被災地でのボランティア体験をさせるために聖週間でも実施された。大槌町ペーアにも聖堂があり、最も大切な祭儀の「聖木曜」「聖金曜」「聖土曜」そして「復活祭」はボランティア活動のあと、夜八時から被災地の聖堂でその典礼が行われた。自分の教会での典礼もよいが、地区の最高責任者も参加されての被災地での聖週間は意義深いものであった。教会はスローガンとして「社会に開かれた教会」を掲げる。信仰が教会内にとどまらず、被災地や社会の中に息づく時、社会に開かれた教会になるのだらう。



3人の現地スタッフと一緒に記念撮影